太宰が「人間失格」を書き上げた街・大宮

なぜ太宰はその一か月後、玉川上水に身を投げなければならなかったのか
大宮に来なかったら死を避けることができたのか
なぜ死の前日にまた大宮にやってきたのか
その秘密を、大宮で長らく太宰について調査研究を重ねた
玉手洋一先生に語っていただきます。

太宰が住んだ「大宮」という街

昭和２３年より名作『人間失格』の執筆に取り掛かった太宰。太宰を大宮に連れてきたのは筑摩書房の古田晃です。太宰が大宮に住んだのは昭和２３年４月２９日から５月１２日までの約２週間でしたが、太宰はこの期間心から安らぎを持って執筆活動に打込み、ようやく『人間失格』を脱稿し、「次の『グッド・バイ』もここで書きたいので、部屋は空けておいて下さい」と言い残し、三鷹の自宅へ帰りました。
それから１ヵ月後の６月１２日昼過ぎ、太宰は突然ひとりで宇治病院へ古田氏を訪ねてくる。
「古田さんいる？」
しかし古田氏は留守でした。古田氏に逢えなかったのをたいへん残念がった太宰が
愛人山崎富栄と玉川上水に身を投げたのは、その翌日、１３日の晩でした。

畑田（旧姓藤縄）信子さんへのインタビュー

太宰が大宮に住んだ時に身の回りの世話をしていた、当時１７歳の少女だった畑田信子（旧姓藤縄）さんは現在も都内某所でお元気にされています。おそらく太宰の面影を直接お聞きできる最後の方です。当時の思い出をお話ししていただくため、取材した時のインタビュー映像をご覧いただきます。

玉手洋一

昭和 36 年生まれ。「太宰が住んだ大宮」ホームページ管理人。埼玉県の郷土史家として、縄文時代から幕末まで広く研究。2008 年より大宮を訪れた太宰に着目し調査を開始、郷土史視点での成果をあげている。
大宮で太宰が見た景色を案内する探索ツアーを企画、また全国に向けて講演活動を行う。

会場となる鳳明館本館の建物は明治 31 年に建てられた、登録有形文化財の木造建築です。
戦後、旅館として改築された館内には、希少な銘木を用いた意匠や職人の手仕事が今も息づいています。
今回特別に「鳳明館」館内ツアーも実施いたします。

【日時】４月４日 13:30 ～・開場 14:00 ～・開演 17:00 終了
【場所】鳳明館 本館　文京区本郷 5-10-5
【金額】おひとり様 3000 円（３０名限定）